

【特集】

水害から学ぶ

狩野川台風60年



①

①塚本地区に堆積した流木②肥田方向より望む蛇ヶ橋付近の状況③被災直後の新田地区④被災直後の伊豆仁田駅付近⑤蛇ヶ橋付近で決壊した来光川⑥塚本地区田んぼの流木をどかす人々



②



③



④



⑤



⑥

昭和33年9月、伊豆半島を直撃した狩野川台風は、狩野川流域市町村で大きな被害をもたらしました。近年では極端な気象状況により、日本各地で台風や豪雨などにより大きな風水害が発生しています。当時の状況を振り返り、いつ起こるかわからない災害に備え、私たちの身を守る方法を考えてみませんか。

未曾有の大災害

狩野川台風とは

『狩野川台風』その「脅威」は昭和33年9月21日にグアム島の東海上で発生しました。勢力を強めながら北上し、昭和33年9月26日、最大風速75メートル毎秒、中心気圧880ミリバール（ヘクトパスカル）というかつてない大きさを伊豆半島を直撃しました。

昭和33年台風22号（国際名：アイダ）被害の大きな台風を地名で表現することは、この「狩野川台風」から始まりました。

狩野川台風は、その流域市町村で死者684人、行方不明者169人、家屋の全壊・流出・半壊6千775戸と甚大な被害をもたらしました。

狩野川台風はさまざまな要因が重なり、被害を拡大させました。

長雨と集中豪雨や上流部での土石流の多発、修善寺橋（現伊豆市）による流れの閉塞など気象や環境の悪条件が重なったことに加え、人的要因も被害の拡大に大きく影響しました。

情報伝達手段の未整備

当時の災害情報の主な伝達方法は、ラジオ、半鐘、有線放送、消防団による水防活動などでした。

しかし、狩野川台風が襲ってきたときには、ラジオ、有線放送は停電のために使用できなくなり、半鐘や消防団による水防活動は、豪雨や浸水などにより、十分な効果を発揮することができませんでした。

19時頃から始まった上流域での土石流の発生から、閉塞した修善寺橋が倒壊する21時50分までのおよそ2時間の間に、上流の地区や修善寺橋で起こっていることがいち早く下流の地区に伝えられていたならば、失われた尊い人命の多くを救うことができたかもしれません。

防災意識の不足

大正以前の狩野川では、毎年のように洪水が起こり、そのたびに多くの犠牲者を出していました。洪水の

記録は、西暦709年（和銅2年）にも残っています。しかし、昭和以降の災害は、下流部での浸水被害にとどまり、大きな人的被害をともなう洪水は起きていませんでした。そのため、地域の住民は、狩野川の氾濫に対してあまり危機意識をもっていないませんでした。

また、修善寺地区（現伊豆市）より下流では、昭和28年から進められてきた堤防の改修工事により、自分たちの住んでいるところは安全であると思いがちでした。

狩野川台風60年シンポジウム

～狩野川台風の記憶を次世代につなぐ～

狩野川台風による悲劇を二度と繰り返さないため、世代間の「記憶をつなぎ」、流域内の「人々をつなぎ」、将来流域に住む人々の「未来の安全・安心へとつなぎ」『強く』『しなやかな』地域をつくっていくためのシンポジウムを開催します。

日時／9月29日（土）13時30分～15時30分
（受付12時30分）

場所／長岡総合会館「アクシスカつらぎ」大ホール
（伊豆の国市古奈255番地）

問合先／国土交通省沼津河川国道事務所
（934-2009）

資料提供：国土交通省沼津河川国道事務所

問合先／総務課（979-8102）